

合理的期待の多様性

—J.スニップによる分類を中心に—

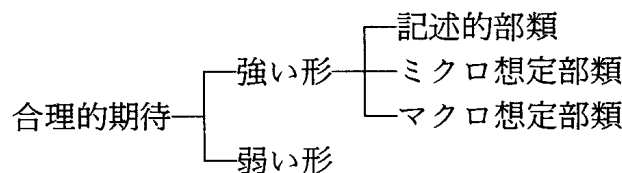
高木 聖

1. はじめに

時代は今、明らかに次なる段階へと移行している。混乱の中にも新しい秩序が生まれつつある。我々は確実に歴史の証人となるであろう。

マクロ経済学への合理的期待概念の導入はきわめてラディカルな政策無効命題を導いた。次々と登場したマクロ・ラショナリストたちは、経済主体(市場参加者)が「合理的」に期待形成をおこなう場合、政府の実施する政策は短期においてすら有効性を失なうというモデルを提示したからである¹⁾。その結果、政策の有効性をめぐってさまざまな議論が噴出すると同時に、合理的期待の支持者・反対者たちは激しい論争をたたかわせた。しかしながら、ひとくちに合理的期待の仮定をおくと言えども、その概念自体は必ずしも統一をみてはいないように思われる。論争の当事者が異なった概念を想定したままでは、合理的期待を仮定したモデルの結論について適切な評価を下すことは不可能であろうし、実りある展開は期待できない。

こうした懸念が台頭するなか、ひとつの解答を試みようとするのが、J.スニップ(Jan Snippe)である²⁾。本稿の目的はスニップによる合理的期待概念の分類を忠実に紹介し、それらの関連性について検討したうえで、合理的期待を取りまく現状を概観し、今後の方向性を探ることにある。



〔表 1〕 スニップによる分類

スニップはまず、合理的期待の概念を「強い形」(strong form)と「弱い

形」(weak form)の二者に大別する。さらに前者は三種類、すなわち、①記述的部類(descriptive variety)、②マイクロ想定部類(micro “as-if” variety)、③マクロ想定部類(macro “as-if” variety)に類別される〔表1参照〕。

以下ではこれらの諸類型について、順次取り上げていくことにしよう。

2. 合理的期待の強い形

合理的期待の「強い形」は、J. ミュースの業績³⁾についての一般的な理解に密接に結びついたものである。J. ミュースによると、期待はその中で役割を果たすものと推定されるモデルに当然含まれるものと同じになる傾向にある、と仮定されている。このように定義づけられているため、合理的期待の「強い形」の概念は結果的にきわめて不明確な概念(anambiguous concept)⁴⁾となる。なんとなれば、以下のような疑問が首をもたげようとするからである。すなわち、くだんの期待とは、個々の人々の抱く期待のことなのか、それとも純粋にマクロ経済的な集計的概念を意味すべきものであるのか。また、その概念は期待がいかんして形成されるかという理論に関わりをもつものであるのか、それとも期待形成プロセスそれ自体については説明を省略したまま、そのうえで帰結のみに議論を集約させるものであるのか。「強い形」の合理的期待について当然生ずべきこうした問題に対して、スニップはそれぞれ解答を用意している。それらは次のように区分されている。

〔1〕 記述的部類

記述的部類は、期待の内容にはほとんど限定されず、個々の経済主体が期待に至る方法を包含したものである。この部類の説明によると、個々の市場参加者は自分たちにとって潜在的に有意な情報を利用しようとする。グロスマンの指摘⁵⁾によると、この種の情報には、

- ① 経済それ自体の構造の詳細に関する知識
- ② 経済構造が必然的なものと確認する過去および現行のデータについての知識

の両者とも含まれる。

この記述的部類と、次に論じられる想定部類とは必ずしも明快な区別がなされるものではない。そこでここでは、合理的期待の「強い形」に対する批判的分析において、(暗黙のうちにせよ、明示的であるにせよ)仮定されている主要なものが、記述的部類に属するものと理解しておくにとどめるものとする。そうした批判を以下に列挙してみることにしよう。

B. M. フリードマンや S. J. DeCanio によると、合理的期待仮説は個人の期待が経済動向についての明確なモデルの形をとると明示的に仮定しているが、学習プロセスが「真のモデル」についての完全な知識に収斂しない可能性も残されており、この仮定は正当な根拠をもつものではない、と論じられている⁶⁾。

Feige/Pearce, M. Darby, W. H. Buiter, P. W. Howitt らは、合理的期待仮説では、情報の獲得に際しコストがかかりすぎる知識の状態を想定している（入手される情報量に対するコストが無視されている）ので、費用と便益を比較考量したうえで慎重な判断を下すという合理的経済行動の面からみて、明らかに矛盾がある、と指摘している⁷⁾。

合理的期待仮説ではあたかも、全ての経済主体が唯一の「真のモデル」を仮定し、同一のアプローチでかかるモデルに接近するかのような想定がなされているが、F. Machlup は個々の人々がそれぞれ異なったモデルを仮定しているはずだ、と主張しているし、また、E. S. Phelps らは「真のモデル」に対して異なった接近の仕方をするのが可能である、と考えている⁸⁾。

F. H. Hahn や A. Kirman によると、個々の人々の期待は、彼らがたとえ誤ったモデルを用いたとしても、実現されうるものとして取り扱われる⁹⁾。

さらに、R. J. Shiller や E. Burmeister の見解によれば、個々の人々が正しいモデルを仮定した場合においても、多数の均衡が存在する可能性が残されているし、人々がそれぞれ異なった均衡状況に基づいて彼らの期待を形成することもありえる¹⁰⁾。いずれにせよ、こうした論者は「強い形」の合理的期待に関して強い疑問を感じ、反対を唱えてやまない。

以上のような意見は合理的期待仮説の中でも「強い形」のなかんずく記述的部類を仮定したものである。したがって、合理的期待仮説の反対者として彼らを引用することは、とりもなおさず支持者側にも記述的部類を想定したうえで議論に参加することを要求する。これらの批判はその際には非常に有用なものとなるが、記述的部類は想定部類に含まれているわけではないので、この点だけをもって合理的期待モデルの一般的な再評価を意図することは不可能であるといえよう。

〔2〕 ミクロ想定部類

合理的期待の「強い形」の中で、ミクロ想定部類は個々の経済主体に言及するものである。このタイプの仮説は個々の人々が体系の構造、データ、所得および価格形成の基礎となる係数をあたかも知っているかのように行動す

るため、彼らの期待はモデルに含まれるものと同一となる。この部類に属するものは、同一の情報セットに対する経済主体間の期待の相違を認めていない。同時に、個々の経済主体の期待がその理論よりも大きな誤差に支配されることも認めてはいない。

かかる点での一例が Begg のモデルである。彼は次のように述べている。

合理的期待仮説は、個々の人々の観察不可能な主観的期待がまさにモデルそれ自体に包含されている真の数学的条件付き期待であるということ
を明言するものである¹¹⁾。

しかしながら、マイクロ想定部類は経済主体が「真のモデル」の知識、そしてまたその誘導型方程式の知識をもっていることを仮定しているわけではない。さらには、その体系が実際の経済動向を生じさせる係数およびデータの知識を要求するものでもない。このことはとりもなおさず、マイクロ想定部類が先に論じられた記述的部類と比較して、「弱い」ものであることを意味している。マイクロ想定部類は個々の経済主体の期待形成プロセスの帰結にのみ関わりをもっており、そうしたプロセス自体を伴うものではない。実際のところ、マイクロ想定部類は期待形成というよりはむしろ期待に関する仮説を構成しているにすぎない。この点こそ、前述された「強い形」の記述的部類との主要な相違点であるといえよう。

〔3〕 マクロ想定部類

Muth は合理的期待をマクロ経済的概念として導入した¹²⁾。集計量において、経済主体はあたかも所得および価格形成の基礎となる（確率的）プロセスを決定する係数やデータを知っているかのごとく行動する、というのが Muth の仮説の主張であった。この命題について、彼自身のことばを引用しよう。

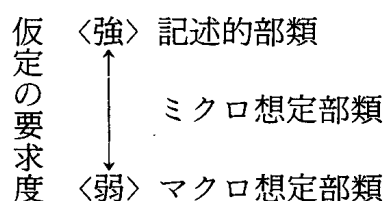
若干正確には次のように言いかえられる。すなわち、期待（より一般的な表現をするならば結果についての主観的確率分布）は同一の情報セットが与えられたときには、その理論の予測（すなわち結果の客観的確率分布）に関する分布となるべき傾向がある。その結果、期待は経済を描写する有意なシステムの構造に、特に依存するものとなる¹³⁾。

この結論は有意なモデル、係数、包含されるべきデータについての完全な知識を個々の経済主体が有していることを仮定することによって到達される

べきものであるはずにもかかわらず、Muth はかくのごとき仮定をおいてはいない。反対に、いずれにせよ、合理的期待仮説は企業家の偶然の所業 (scratch work) が方程式の体系に似ていることを主張するものではない、とするのが彼の見解であった¹⁴⁾。また、さまざまな経済主体の期待間の相違が除外されるような、そしてその理論よりも大きな誤差に支配されないような状況にあるとき、個々の経済主体があたかも「真のモデル」を知っているかのように行動するという仮定もおいてはいないのである。その代わり、合理的期待はマクロ経済的概念であるため、Muth の仮定は企業家の予測が完全なものであるというものではなく、すなわち企業家の期待が全て同一のものであるというものでもない¹⁵⁾。一企業の期待は、その理論よりも大きな誤差に依然として支配されるであろうから、経済学の限界収入生産物はゼロである、ということも意味してはいない¹⁶⁾。明らかに、Muth による合理的期待仮説のマクロ想定部類は、先に紹介されたミクロ想定部類よりも「弱い」ものであるといえよう。マクロ想定部類は個々の経済主体の期待形成プロセスの帰結に関する仮定を何らおいておらず、その結果として実際のところ、期待形成の理論を全く定式化してはいないのである。標準的マクロ経済的視点から考察すると、この点は非常に賢明である。Gomes は次のように指摘している。

もしも集計的期待にのみ関心がもたれるのであれば、個々の人々の期待の確率分布の存在は重要なことではなくなる。あらゆる個人が同一の「真の期待」を抱くのであれば、最終的には、個々の人々の集計量が市場レベルで動くことになろう¹⁷⁾。

スニップによる合理的期待の「強い形」の三分は、仮定の強弱の度合いによるものであった。その説明によると、強い仮定を要求するもの（したがってより強い批判をあびるもの）から順に、記述的部類、ミクロ想定部類、マクロ想定部類と並列されるものとみうけられる〔表2参照〕。



〔表2〕 合理的期待の「強い形」と仮定の要求度

3. 合理的期待の弱い形

経済動向における期待の役割をモデル化しようという試みは、通常、決定論的プロセスの結果としての期待を考察しており、それは期待とそれらの期待の根底にあるものと仮定されている情報との関数関係によって表わされている。こうした関係は期待関数と呼ばれている。

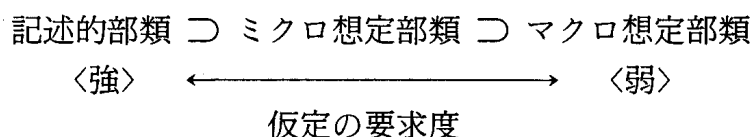
経済的合理性とは、個々の経済主体が「より少ない」よりは「より多い」方を選好するということの意味しているので、この概念は「真のモデル」に外生的な変数のセットのサブセットにのみ期待が依存することを仮定する期待関数に基礎づけられたものであり、そしてまたモデルとは無関係な期待関数を利用するモデルの厳密性を危うくさせるものであろう。なんとなれば、多くの状況下において、こうした手続きよりも多くの情報を個人が保持する、あるいは獲得することが明示的にせよ、暗黙のうちにせよ、仮定されているからである。とりわけ、その情報というのは期待誤差の頻度に関するものであり、そうした誤差の系統的なパターンを明らかにするものである。個々の人々が「より少ない」よりも「より多い」ことを選好する場合には、こうした情報を利用することをさし控えることは、彼らにとって非合理的なことになろう。したがって、こうした情報は合理的期待が達成されるまで、個々の人々に彼らの期待関数を修正させ続けるであろう。実際、この点は合理的期待仮説の「強い形」の主要な根本的原理なのである¹⁸⁾。

このようなわけで、合理的期待仮説の登場によって、以前にはややもすれば見過ごされがちであった「経済的人間」の重要性が再認識させられたのである。しかしながら、これまでの議論ではいずれのタイプをとってみても、個々の経済主体がいかにして、期待の修正にあたって利用した情報を受け取ったか、また収集したか、についての説明がなされていないままであった。この局面において、次のような疑問に対処せねばなるまい。すなわち、この情報にはコストがかからないのか。そしてコストがかかるものと想定される場合には、合理的期待の「強い形」と整合的になるよう、期待を形成することを要求される程の情報量を収集することがはたして価値のあることなのか。このような疑問が合理的期待の「弱い形」の基盤を形成している。合理的期待仮説の「弱い形」は情報獲得にはコストが当然かかること、したがってその行動は熟考のうえではじめてなされるということを前提としている。なかんずく、期待形成をおこなう人々は、限界情報の効用と費用とを等しくさせるであろう、ということが仮定されている。したがってこの考え方は、

Alchian や Stigler の議論¹⁹⁾の延長線上に存在するものと位置づけることができよう。

4. 合理的期待諸概念の関係

さまざまな合理的期待の概念を区別することは、それらが相互に調和しないということを暗示するものではない。むしろ反対に、「強い形」の記述的部類は二つの想定部類（マイクロ、マクロ）と無矛盾なものである概念を包含している。しかしながら、それぞれのタイプは決して同等のものではない。なるとなれば想定部類は記述的部類を包含しないからである。同様にマイクロ想定部類はマクロ想定部類の変形と整合的な期待を包含するが、その逆は成り立たないのである〔表3参照〕。



〔表3〕 合理的期待の強い形と包含の可能性

不幸なことに、このような単純な関係は、合理的期待の「強い形」と「弱い形」との間には存在しない。前節でふれたように、「強い形」は選択の論理が他の期待メカニズムの拒否を導くであろうということを指摘することによって防衛されてきた。同じ選択の論理が合理的期待の「弱い形」にもあてはめられる。しかし、「強い形」は非合理的期待メカニズムの禁止に対する選択の論理の能力に関連するものであるが、「弱い形」は期待メカニズムがひとつの代替案として用いられることを我々に肯定的に教示するために、その利用を示唆するものである。不適切な期待関数の拒否に焦点をあてることよりもむしろ、「弱い形」はいかにして拒否されたメカニズムが置き換えられるか、という問題に関連するものである。不適切な期待メカニズムは拒否されるべきであるということと、いかにしてそれらが置き換えられるべきかということは、全く別の問題なのである。この点において、合理的期待の「弱い形」は合理的期待の「強い形」の基盤となる根本原理に対して必要な補完物であるといえよう。

そのうえ、Boland/Newman が観察しているように²⁰⁾、経済的合理性が経済主体に対して過去の期待誤差に関する情報に基づいて行動することを要求する方法は、彼らの知識についての見解に依存すべきものである。ここで彼らの意見に耳を傾ける必要がありそうである。

我々がもし「ニュース」の変化の個人の期待へのインパクトおよび個人
の意思決定パターンへのインパクトを決定しようとするならば、そのニュー
ースの変化が供されることを通じ知識の理論を十分に特定化しなければ
ならない²¹⁾。

しかしながら、これらが包含されている現代の知識理論と同様に、最近の
科学的論説の再構築が示唆しているように、置換することなしに拒否するこ
とは、ほとんど実りなきものと考えられる。個々の人々がそのような、知識
についての新しい見解を仮定するのであれば、合理的期待の「弱い形」をみ
なすべき、追加的な理由としてあげられることになるであろう。

しかしながら、合理的期待の「弱い形」が満足な知識への最善のルートに
関して指示を供給する能力を有する選択の論理を必要としているため、こう
した補完的役割を成し就げるにあたって成功を期待しうるか否かについて
は、はなはだ疑問である。皮肉なことに、導入に関わる問題に気づいたこと
によって、そのようなルートにおけるいかなる信念も論理的に正当化されえ
ないことを認識した。すなわち、経験的知識に対する誰かある一人の主張に
とっての導入証拠を供給する方法は何ら存在しないし、実際にはその同じこ
との裏返しとして、さまざまな情報セットから「真のモデル」に関する推測
を導出する方法も何ら存在しないのである。したがって、どれほどの追加的
情報が我々の予知の欠如についての確実な縮小（知識の前進）のために要求
されるかを決定することは不可能であり、またその結果、そのような減少の
コストを知ることも不可能となるのである。さらには、このようなコストを
知ろうとするには、知識がないことによって生じるであろう行動の結果を知
っていなければならないので、知識のないことのコストに依存する効用につ
いて知ることもまた不可能となる。しかしながら、こうした知識は実際のプ
ロセスを理解すること、すなわち正確には、合理的期待仮説の「弱い形」が
個々の人々に求めることを仮定するような種類の知識であり、したがっても
はや利用可能であると仮定されえないような種類の知識を要求しているので
ある。

実際のところ、純粋な選択の論理はいくつかの禁止事項を供給しているも
のの、我々に対してなすべきことを積極的に教示することはない²²⁾。このこと
は、合理的期待仮説の「強い形」の基盤となる根本原理が不完全なままであ
り、合理的な経済行動が合理的期待の「強い形」の変形を包含するという主
張に対する正当性を浸食するということを意味している。合理的期待仮説の
「強い形」と「弱い形」の両立性は証明されてはいないものである。

5. 結びにかえて

J.スニップは、①合理的期待のさまざまな部類を描写することによって、②合理的期待の「強い形」の各部類が相互に両立しうるものではあっても同等のものではないことを示すことによって、③「強い形」の本質が不完全なものであることを示すことによって、合理的期待仮説のあいまいさを明らかにしようとしている。その趣旨は Hahn の「合理的期待の展開は小規模な地域的攪乱にすぎない」²³⁾ という文脈に沿うものであろう。しかしながら、一方ではこうした悲観的（否定的）な見解が存在するものの、他方では少なくとも問題提起という役割において、経済理論における大いなる前進と把える向きも根強い。

従来、合理的期待学派の理論については、くりかえし述べているように、その政策的帰結が極端であることから、「合理的期待」という新奇な概念の採用に対し、やや過敏とも思える拒絶反応が見うけられた。すなわち、「ケインズ派経済理論に対する反革命」という位置づけ²⁴⁾ から、“ケインズ学派に対抗するマネタリストの中でも特に血気にはやる若手集団” というラベルを通じてのみ把握されがちであったため、批判の急先峰に立っていたのは、いわゆるケインジアン、とりわけポスト・ケインジアンが大半を占めていたのである。けれども、かかる学派の議論の枠組はバーローの指摘²⁵⁾を待つまでもなく、次の三つの点で特徴づけられている。すなわちその三点とは、①合理的期待仮説の採用、②即時的（連続的）市場均衡の仮定、③情報の不完全性、である。これらのうち、合理的期待仮説の採用については、むしろ前向きな評価がなされ、コンセンサスを得つつあるとあってよいであろう²⁶⁾。その結果、論点は残る二点の仮定をめぐるものへとシフトしていくのは必然的方向である。そこで、最近の研究では、“鉄の結束”を誇るかにみえたマネタリスト内部からの疑問が呈示され、新たな方向を模索中である。具体的には、穏健派マネタリスト²⁷⁾として著名な K. ブルンナーや A. H. メルツァーの議論——リスクと不確実性の区別の問題——がそれである²⁸⁾。しかも、その議論と同一線上において、極めて重要な議論が注目されつつある。つまり、裁量的介入政策の守護神とも目されていた J. M. ケインズ自身が実は「ルール」政策支持者であったのではないか、という見解である²⁹⁾。

きわめて乱暴に概略するだけでも、以上のような状況を見てとることが可能である。合理的期待理論が果たした役割は現況を鑑みるところ、決してポスト・ケインジアンのように過小評価して片付けてしまってよいものでもな

く、他方、ケインズ革命に対する反革命という見方も速断に過ぎるものと思われる。J. スニップの意図するところとは別に、彼らの努力によって、ようやく合理的期待理論の全体像が明らかにされつつある現過程では、その位置づけをいたずらに急ぐよりも、マクロ経済学における新たなアングルからの問題提起として率直に受け取めることが肝要であると同時に、より本質に迫る議論の発展に向けて努力が続けられなければならない。実はその影響力の大きさは、現段階でははかり知れない力を秘めているものと考えられねばならないし、またその議論はいまだ緒についたばかりなのである。

注

- 1) 政府の安定化政策を積極的に支持するケインジアンに対し、マネタリストたちもその短期的(一時的)なインパクトに関しては認めていた。合理的期待学派はさらにその態度を尖鋭化し、実質産出高、失業率など実物変数には政策効果は何ら期待できないと主張した。

J. トービンはこうしたグループを「マケタリズムII号(マーク・ツー)」と呼んでいる。

Tobin, J., *Asset Accumulation and Economic Activity; Reflections on Contemporary Macroeconomic Theory*, Basil Blackwell, 1980, chap. 2. 浜田宏一・藪下史部訳『マクロ経済学の再検討』日本経済新聞社, 昭和56年。

- 2) Snippe, J., "Varieties of Rational Expectations: their differences and relations", *Journal of Post Keynesian Economics*, vol. 8. No. 3., spring 1986, pp.427~437.

スニップによる分類はS. フィッシャーの分類(Fischer, S., "On Activist Monetary Policy with Rational Expectations", In: Fischer, S., (ed.), *Rational Expectations and Economic Policy*, The University of Chicago Press, 1980.)とも整合的なものである。これらを踏まえた解説としては次の文献があげられる。

浦上博達・小島照男・小沢健市共訳『合理的予想の経済理論』文化書房博文社 昭和62年 解説 134~143ページ。

- 3) Muth, J. F., "Rational Expectations and the Theory of Price Movements", *Econometrica*, July 1961, pp.315~335.
- 4) Snippe, J., *op. cit.* p. 428.
- 5) Grossman, H. I., "Monetarism and Economic Theory", *Econometrica*, vol. 47, 1980, p.10.
- 6) Friedman, B. M., "Optimal Expectations and the Extreme Information Assumptions of Rational Expectations Macromodels", *Journal of Monetary Economics*, vol. 5, 1979, pp.23~41.

DeCanio, S. J., "Rational Expectations and Learning from Experience", *Quarterly Journal of Economics*, vol. 93, 1979, pp.47~57.

- 7) Feige, E. L., and Pearce, D. K., "Economically Rational Price Expectations", *Journal of Political Economy*, June 1976, pp.499-522.
- Darby, M., "Rational Expectations under Conditions of Costly Information," *Journal of Finance*, vol. XXXI, No. 3, June 1976, pp.889~895.
- W. H. Buiter, "The Macroeconomics of Dr. Pangloss: A Critical Review of New Classical Macroeconomics", *The Economic Journal*, vol. 90, No. 357, March 1980, pp.34~50.
- Howitt, P. W., "Activist Monetary Policy under Rational Expectations", *Journal of Political Economy*, April 1981, pp.249~269.
- かかる指摘については、拙稿も併せて参照されたい。「合理的期待と情報構造—クカーマンの一般化を中心に—」早稲田大学大学院『商学研究科紀要』 第25号, 昭和62年12月 131~152ページ。
- 8) Machlup, F., "The Rationality of Rational Expectation", *Kredit und Kapital*, vol. 16, pp.172~183.
- Phelps, E. S., "The trouble with Rational Expectations and the Problems of Inflation Stabilization", In: Frydman, R., and Phelps, E. S., (eds.), *Individual Forecasting and Aggregate Outcomes: Rational Expectations Examined*, Cambridge University Press, 1983. pp.31~41.
- Di Tata, J. C., "Expectations of Others' Expectations and the Transitional Non Neutrality of Fully Believed Systematic Monetary Policy", In: *Ibid.* pp.47~66.
- Frydman, R., "Individual Rationality, Decentralization, and the Rational Expectations Hypothesis", In: *Ibid.* pp.97~122.
- 9) Hahn, F. H., "Exercises in Conjectural Equilibria", *Scandinavian Journal of Economics*, vol. 79, 1979, pp.210~226.
- _____, "On Non-Walrasian Equilibria", *Review of Economic Studies*, vol. 45, 1978, pp.1~17.
- _____, "Monetarism and Economic Theory", *Economica*, vol. 47, 1980, pp.1~17.
- Kirman, A., "On Mistaken Beliefs and Resultant Equilibria", In: Frydman and Phelps, *op. cit.* pp.147~166.
- 10) Shiller, R. J., "Rational Expectations and the Dynamic Structure of Macroeconomic Models: A Critical Review", *Journal of Monetary Economics*, vol. 4, 1978. pp.1~44.
- Burmeister, E., "On some Conceptual Issues in Rational Expectations Modelling", *Journal of Money, Credit, and Banking*, vol. 12, 1980, pp.800~816.
- 11) Begg, D. K. H., *The Rational Expectations Revolution in Macroeconomics: Theories and Evidences*, Oxford, 1982, p.30.
- 12) Muth, J. F. *op. cit.*
- 13) *Ibid*, p.316.
- 14) *Ibid*, p.317.

- 15) *Ibid*, p.317.
- 16) *Ibid*, p.316.
- 17) Gomes, G. M., "Irrationality of Rational Expectations", *Journal of Post Keynesian Economics*, Fall 1982, 5(1), pp.51~65.
- 18) この点に関しては以下の文献が参考となるであろう。
 Lucas, R. E. Jr., "Review of R. C. Fair: A Model of Macroeconomic Activity", *Journal of Economic Literature*, vol.13, 1975, pp.889~890.
 McCallum, B. T., "The Current State of the Policy-Ineffectiveness Debate", *The American Economic Review*, vol.69, 1979, pp.240~245.
 Rutledge, J., *A Monetarist Model of Inflationary Expectations*, Lexington, 1974.
 Willes, M. H., "Rational Expectations: A counterrevolution", In: D. Bell and J. Kristol (eds.) *The Crisis in Economic Theory*, Basic Books, 1981, pp. 81~96. 中村達也・柿原和夫訳『新しい経済学を求めて』日本経済新聞社 昭和60年119~139ページ。
- 19) Alchian, A., "Information cost, Pricing and Resource Unemployment", In: E. S. Phelps, (ed.), *Microeconomic Foundations of Employment and Inflation Theory*, Macmillan, 1969, pp.27~52.
 Stigler, G. J., "The Economics of Information", *Journal of Political Economy*, vol. 69. 1961, pp.213~225.
- 20) Boland, L. A., and Newman, G., "On the Role of Knowledge in Economic Theory", *Australian Economic Papers*, vol. 18, 1979, pp.71~80.
- 21) *Ibid*, p.75.
- 22) Shackle, G. L. S., *Epistemics and Economics*, Cambridge University Press, 1972.
- 23) Hahn, F. H., "Review of Begg (1982)", *Economic Journal*, vol.94. 1983, pp. 922~924.
- 24) Willes, M. H., *op. cit.*
 ディーンは次のように述べている。「フリードマン=フェルプス・モデルから導かれる政策上の立場は非介入論である。ところがある論者は、このモデルに含まれる短期の失業率とインフレ率の代替関係を取り上げて、微調整の続行を求める委任状と解釈した。経済安定化政策反対論の論理に潜むこの抜け穴はジョン・ミューズの『合理的予想』理論を応用する若手理論家集団の手によって早急に塞がれた。この学派は専門家から『RATEX』と呼ばれている(この名前には敏感なケインズ派を餌で誘い寄せる殺虫剤という言外の意味が含まれている)。」
 Dean, J. W., "The Dissolution of Keynesian Consensus", In: Bell, D. and I. Kristol (eds.), *op. cit.* pp.27~28. 『訳書』48~49ページ。
- 25) Barro, R. J., "Rational Expectations and the Role of Monetary Policy", *Journal of Monetary Economics*, 2, January 1976, p1.
- 26) 例えば、教科書レベルにおいても、次のような論述が見うけられる。「合理的期待の形成とは、各経済主体が将来の経済変数の値を予想するにあたって、自分のもっている情報をすべて最大限に利用するということであるから、そのこと

自体は合理的経済主体の予想形成態度として、まことにもっともな行動の様式をあらわしているということができよう。というのは、情報もまた広い意味での経済的資源の一つであり、それを最善の仕方役立たせるといのは、資源の効率的利用を課題とする経済学の立場からして、作法にかなっているのである。」

福岡正夫「ゼミナール経済学入門」日本経済新聞社 昭和61年 408ページ。

27) 滝川好夫「マネタリズムの理論構造——M.フリードマンをめぐる——」神戸大学『国民経済雑誌』第141巻第4号 昭和55年4月 85ページ。

28) その詳細については、以下の文献が参考となろう。

Meltzer, A. H., "Rational Expectations, Risk, Uncertainty, and Market Responses", In: Wachtel, P. (ed.), *Crisis in the Economic and Financial Structure*, Lexington, Books, 1982, pp.3~22.

Klamer, A., *The New Classical Macroeconomics: Conversations with the New Classical Economists and the Opponents*, Harvester Press, 1984, chap. 10, "Conversation with a Monetarist: Karl Brunner", pp.179~202.

29) メルツァーの意見を引用しよう。「ケインズはルールに反対ではなかった。『一般理論』の中でケインズが投資の国家的指導を支持しているまさにその理由は、国家が投資の可変性を抑制し、結果的に所得および雇用の変動を減ずると考えたからである。この信念（あるいは願望）は誤って解釈されてしまった。」

Meltzer, A. H., Discussion, In: Worswick, D. and J. Trevithick (eds.), *Keynes and the Modern World*, Cambridge University Press, 1983, p.83.

メルツァーの市場観に関しては、拙稿を参照されたい。

拙稿 「市場経済の均衡と不確実性——A.メルツァーの見解を中心に——」『早稲田商学』 第330号 昭和63年10月 157~176ページ。